

越後屋江戸本店子供の供給元について

—「永聴記」の子供到着記事の検討から—

西坂 靖

はじめに

- 一 「永聴記」における子供の江戸到着記事
- 二 「永聴記」の半元服記事との照合
- 三 「江戸本店手代子供請状」との照合
おわりに

はじめに

本稿は、三井越後屋の江戸本店の奉公人がどこから供給されてきたかという問題について、江戸本店の「永聴記」に記された〈子供の江戸到着記事〉を手がかりにして検討するものである。奉公人の供給元の解明は、都市社会と大商家との関係を考えるうえで、基礎的な課題のひとつである。⁽¹⁾

江戸店持ち京商人が抱える奉公人に関して、従来の研究では、例えば林玲子氏は「京都に本店のある商家では、京都周辺だけでなく、本家の出自その他関係の深い地域からも雇った⁽²⁾」と述べている。この理解に従えば、三井越後屋の江戸本店の奉公人は、三井家一族が居住する京都および三井家の本貫の地である伊勢から供給されることになる。

一方で、近世後期の三井の店々における奉公人の研究では、越後屋京本店においては京都の出身者の比率が増加し⁽³⁾、また江戸兩替店においては江戸出身者の比率が増加する⁽⁴⁾など、店舗の所在する都市から供給される奉公人が増加していく傾向がみられるという事例が示されている。

それでは、越後屋江戸本店の場合はどうであろうか。江戸本店に関するこれまでの研究では、近世後期において奉公人がどこから供給されてきたかについては具体的には明らかになっていない。これは史料の不在によるところが大きい。三井の店々のうち越後屋京本店、京兩替店、江戸兩替店については、奉公人請状の控が現存しているため⁽⁵⁾、これを基本史料として用いることによって、新規入店者の全体像を網羅的に明らかにすることができる。これに対し、江戸本店の場合、今に残る史料のうちには奉公人請状の控に類するものは存在していない。

本稿で、奉公人請状の控の代わりに着目するのは、江戸本店が作成した記録のうち「永聴記⁽⁶⁾」である。この「永聴記」の記事のなかには、伊勢や京都から子供が江戸本店に勤務するために到着したことを示す記事が数多く見られる。これらを手がかりにして江戸本店の奉公人の供給元について検討していくことにする。

(1) 京都の町方社会と三井との関係について、筆者（西坂）は越後屋京本店において奉公人のうち京都町方出身者の比率が増加していったこと（注（3）参照）をもって、三井と町方社会の関係が深まっていったことを示す局面のひとつとして評価した（西坂靖「町方社会と三井」杉森哲也編『シリーズ三都 京都巻』東京大学出版会、二〇一九年、一五六ページ）

ジ)。また、江戸の町方社会と上方商人の江戸店との関係については、齋藤修氏が伊勢商人・長谷川家を事例に挙げて、一八二二年の江戸店五店の男子奉公人一一人のうち一〇七人が伊勢出身者であったことを述べ、「江戸町人の社会そのものと切れていた」という評価を示している（齋藤修『江戸と大阪―近代日本の都市起源』N T T出版、二〇〇二年、一三七ページ）。

(2) 林玲子「江戸店」（西山松之助他編『江戸学事典』弘文堂、一九八四年）二三二―ページ。

(3) 西坂靖『三井越後屋奉公人の研究』（東京大学出版会、二〇〇六年）第4章・第5表。この表によると享保五年（一七二〇）から元文四年（一七三九）までの二〇年間に、越後屋京本店に店表奉公人として入店した者は二九四人を数えるが、そのうち京都町方出身は二一七人、比率にして四〇パーセントで、過半には達しない。その後、文政三年（一八二〇）から天保一〇年（一八三九）までについてみると、二八四人中一九二人、比率にして六八パーセントを京都町方の出身者が占めるようになっていく。さらに幕末の元治元年（一八六四）の時点では、店表の住込み奉公人のうち七六パーセントが京都町方の出身者であった。

(4) 西坂靖「江戸店の奉公人調達と都市社会―三井江戸両替店の事例―」（『年報都市史研究』三号、山川出版社）表2。この表によれば三井江戸両替店に店表の奉公人として入店した者は、寛保元年（一七四一）から宝暦一〇年（一七六〇）までの二〇年間に三〇人を数えるが、そのうち江戸町方出身は四人、比率にして一三パーセントに過ぎない。その後、文政四年（一八二二）から天保一一年（一八四〇）までについてみると、四五人中二人、比率にして四九パーセントを江戸町方の出身者が占める。さらに天保一二年（一八四一）から万延元年（一八六〇）年までについてみると、四四人中四人、比率にして九三パーセントにもなる。

(5) 京本店は「京本店手代子供請状」（三井文庫所蔵史料 別三六、本一五三六―一五三八）ほか、京両替店は「出勤帳」（三井文庫所蔵史料 追三八二）、江戸両替店は「請状并江戸一家之控」（三井文庫所蔵史料 本一三九二）が奉公人請状の控に相当する。なお京両替店の「出勤帳」については、安岡重明「三井京両替店における奉公人の勤続事情」（『社会学』第四二号、一九八九年、のち安岡重明『近世商家の経営理念・制度・雇用』晃洋書房、一九九八年、に所収）におい

て、一覽表のかたちで一人一人のデータが紹介されている。

(6) 「永聴記」(三井文庫所蔵史料 本一五二、一五三)。

一 「永聴記」における子供の江戸到着記事

「永聴記」は、江戸本店において作成された記録類のひとつである。五番と六番の番号が付された二冊が現存している。このうち五番には寛政九年(一七九七)正月から文政四年(一八二二)二月まで、六番には文政五年(一八二二)正月から天保九年(一八三八)二月まで、あわせて四二年分が記録されている。日誌の形式であるが、日々書き継いだものではなく、他の記録類から後年参照されるべき記事を摘記したものと見られる。内容は、三井家一族や奉公人の動向、江戸や各地の災害情報、町触などの政治情報などである。奉公人の動向を記した記事のなかには、江戸本店で勤務するためにやってきた子供の到着記事も含まれる。次の史料は、寛政九年(一七九七)二月一三日の記事である(傍線筆者、以下同)。

一 当店勤仕子供^a 勢州勝手森田佐吉^b、本木長太郎、堀井太三郎、道中無恙今夕^c下着いたし候

「当店勤仕子供」(傍線a)すなわち江戸本店に勤務予定の子供三人が、この日の夕方に「下着」(傍線c)すなわち江戸に到着したというものである。「勢州勝手」(傍線b)と記されていることから、この子供たちは三井の伊勢松坂店を介して供給された者たちであることがわかる。このような、江戸本店に勤務予定の子供が無事に江戸に到着(「下

着」または「着府」「到着」と表記）したことを記す記事を、本稿では〈子供の江戸到着記事〉と呼ぶことにする。

「永聴記」に記された、子供の江戸到着記事について、記事の日付、子供の供給元、子供の人数を示したのが、第1表である。寛政九年（一七九七）から天保九年（一八三八）までの四二年の間に一五九件、五〇七人が記されている。一年当たりの件数は、最多八件（寛政九年・天保三年）、最少一件（文化元〜三年ほか）で、かなりばらつきがある。平均すると三・七件という数値が得られる。一年当たりの人数をみると、最多が二七人（文化一二年）、最少二人（文政五年）で、平均すると一二・一人となる。

奉公人の到着の日付についてみると、一年のうちで時期が特定されているわけではなく、二月から二月までまんべんなく記事があるが、三月（一五九件のうち二五件）と九月（同三〇件）の二つのピークがみられる。

供給元に着目すると、〈伊勢抱え〉（「勢州抱」「勢州勝手」「いせ抱」「勢州より」と表記）、〈京抱え〉（「京抱」「京勝手」と表記）、そして供給元がどこか明記されていない〈記載なし〉の三つに区分される。それぞれにつき、件数・人数をまとめたものが第2表である。これによると、〈伊勢抱え〉が六三件・二〇九人、〈京抱え〉が一七件・七〇人、また〈記載なし〉が七九件・二二八人となる。

この〈記載なし〉の者たちをどのように解釈すべきか。三井の江戸店において、子供の供給元については、〈伊勢抱え〉〈京抱え〉のほかに、〈江戸抱え〉を加えた三つのタイプを想定することができる。江戸到着記事のうち、供給元の〈記載なし〉の子供たちについても、これらの三つのうちに区分されると考えるが、記事の文言において、「道中無事に「下着」「着府」した」と記されている以上、彼らは〈江戸抱え〉ではない。〈伊勢抱え〉〈京抱え〉のいずれかであると考えるのが妥当であろう。この前提のもとに、以下においては江戸到着記事に記載された子供を総称して〈江戸下りの子供〉と呼ぶことにする。

第1表 「永聴記」における子供の江戸到着記事（寛政9年～天保9年）

#	記事年月日	供給元	人数	1年分 合計	#	記事年月日	供給元	人数	1年分 合計
1	寛政9年 2月13日	勢州勝手	3	22	25	3月12日	勢州勝手	4	5
2	寛政9年 3月27日	勢州勝手	3		26	9月5日	勢州勝手	3	
3	寛政9年 4月8日	京勝手	4	27	享和2年 3月19日	<記載なし>	2	5	
4	寛政9年 5月14日	<記載なし>	1	28	5月29日	勢州勝手	3 (名前不明)		
5	寛政9年 6月21日	<記載なし>	1	29	享和3年 6月8日	京勝手	7 (名前不明)	7	
6	寛政9年 8月20日	勢州勝手	2	30	8月25日	<記載なし>	不明 (名前不明)		
7	寛政9年 9月24日	勢州勝手	6	20	31	文化元年 3月12日	勢州勝手	5 (名前不明)	5
8	寛政9年 10月14日	勢州勝手	2		32	文化2年 9月7日	<記載なし>	6 (名前不明)	
9	寛政10年 2月26日	勢州勝手	6	20	33	文化2年 2月25日	<記載なし>	3 (名前不明)	3
10	寛政10年 3月10日	勢州勝手	2		34	文化3年 2月16日	<記載なし>	2	
11	寛政10年 5月9日	京勝手	6	35	文化4年 3月17日	<記載なし>	4	16	
12	寛政10年 5月13日	勢州勝手	3	36	4月23日	<記載なし>	4		
13	寛政10年 10月2日	勢州勝手	3	37	4月28日	<記載なし>	2	22	
14	寛政11年 2月5日	勢州勝手	2	38	11月6日	<記載なし>	2		
15	寛政11年 3月4日	勢州勝手	2	18	39	11月25日	<記載なし>	2	
16	寛政11年 3月30日	勢州勝手	4		40	文化5年 3月1日	勢州勝手		5
17	寛政11年 4月23日	京勝手	6	41	5月25日	いせ抱	4	22	
18	寛政11年 9月9日	勢州勝手	2	42	6月8日	京抱	5		
19	寛政11年 11月10日	勢州勝手	2	43	10月5日	<記載なし>	7		
20	寛政12年 3月14日	勢州勝手	1	4	44	10月5日	勢州勝手	1	
21	寛政12年 4月2日	勢州勝手	2		45	文化6年 2月10日	勢州抱	3	
22	寛政12年 4月10日	勢州勝手	1	12	46	4月21日	京抱	2	
23	享和元年 2月12日	勢州勝手	2		12				
24	享和元年 2月21日	勢州勝手	3						

越後屋江戸本店子供の供給元について（西坂）

47	記事年月日	5月3日	供給元	勢州抱	人数	2	1年分 合計
48	記事年月日	9月9日	供給元	<記載なし>	人数	1	
49	記事年月日	5月13日	供給元	<記載なし>	人数	1	9
50	記事年月日	9月16日	供給元	勢州抱	人数	8	
51	記事年月日	9月18日	供給元	京抱	人数	4	4
52	記事年月日	9月22日	供給元	<記載なし>	人数	3	3
53	記事年月日	3月23日	供給元	<記載なし>	人数	2	5
54	記事年月日	11月2日	供給元	京勝手	人数	3	
55	記事年月日	8月19日	供給元	京抱	人数	5	8
56	記事年月日	10月23日	供給元	勢州勝手	人数	3	
57	記事年月日	2月4日	供給元	勢州抱	人数	4	27
58	記事年月日	3月22日	供給元	<記載なし>	人数	4	
59	記事年月日	4月26日	供給元	勢州抱	人数	5	7
60	記事年月日	9月14日	供給元	勢州抱	人数	7	
61	記事年月日	11月15日	供給元	勢州抱	人数	4	3
62	記事年月日	11月22日	供給元	京抱	人数	3	
63	記事年月日	2月5日	供給元	勢州	人数	1	9
64	記事年月日	3月4日	供給元	勢州抱	人数	2	
65	記事年月日	9月29日	供給元	勢州抱	人数	6	
66	記事年月日	2月2日	供給元	<記載なし>	人数	3	21
67	記事年月日	3月24日	供給元	勢州抱	人数	3	
68	記事年月日	5月17日	供給元	<記載なし>	人数	6	92
69	記事年月日	9月22日	供給元	從勢州	人数	5	
70	記事年月日	11月18日	供給元	勢州抱	人数	1	
71	記事年月日	11月23日	供給元	京抱	人数	3	17
72	記事年月日	2月23日	供給元	勢州抱	人数	3	
73	記事年月日	4月4日	供給元	勢州抱	人数	5	6
74	記事年月日	9月22日	供給元	勢州抱	人数	6	
75	記事年月日	9月25日	供給元	京抱	人数	1	2
76	記事年月日	11月5日	供給元	<記載なし>	人数	2	
77	記事年月日	3月19日	供給元	勢州抱	人数	5	9
78	記事年月日	4月14日	供給元	勢州勝手	人数	2	
79	記事年月日	9月13日	供給元	勢州勝手	人数	2	
80	記事年月日	4月2日	供給元	勢州抱	人数	6	11
81	記事年月日	6月6日	供給元	勢州抱	人数	5	
82	記事年月日	2月17日	供給元	勢州抱	人数	2	12
83	記事年月日	4月1日	供給元	<記載なし>	人数	3	
84	記事年月日	9月19日	供給元	京勝手	人数	4	3
85	記事年月日	11月18日	供給元	勢州勝手	人数	3	
86	記事年月日	9月1日	供給元	京勝手	人数	2	2
87	記事年月日	4月7日	供給元	勢州抱	人数	1	6
88	記事年月日	8月27日	供給元	<記載なし>	人数	5	
89	記事年月日	4月28日	供給元	<記載なし>	人数	4	10
90	記事年月日	9月2日	供給元	<記載なし>	人数	6	
91	記事年月日	3月14日	供給元	<記載なし>	人数	5	11
92	記事年月日	5月27日	供給元	<記載なし>	人数	1	
93	記事年月日	8月27日	供給元	<記載なし>	人数	3	2
94	記事年月日	10月15日	供給元	<記載なし>	人数	2	

#	記事年月日	供給元	人数	1年分 合計	#	記事年月日	供給元	人数	1年分 合計
95	文政9年 2月1日	〈記載なし〉	1	22	119	5月18日	〈記載なし〉	2	
96	2月29日	〈記載なし〉	7		120	10月10日	〈記載なし〉	1	
97	4月24日	〈記載なし〉	5		121	10月13日	〈記載なし〉	3	
98	8月26日	〈記載なし〉	2		122	10月21日	〈記載なし〉	1	
99	9月28日	京勝手	4		123	天保3年 4月1日	〈記載なし〉	2	21
100	10月28日	〈記載なし〉	3		124	4月21日	〈記載なし〉	1	
101	文政10年 3月22日	〈記載なし〉	2	11	125	5月3日	〈記載なし〉	1	
102	5月2日	〈記載なし〉	3		126	6月25日	〈記載なし〉	2	
103	5月27日	〈記載なし〉	2		127	7月9日	〈記載なし〉	2	
104	9月25日	〈記載なし〉	4		128	9月24日	〈記載なし〉	8	
105	文政11年 2月24日	〈記載なし〉	2	21	129	9月29日	〈記載なし〉	2	
106	4月18日	〈記載なし〉	2		130	10月14日	〈記載なし〉	3	
107	9月21日	〈記載なし〉	2		131	天保4年 3月8日	〈記載なし〉	4	15
108	10月22日	〈記載なし〉	5		132	3月26日	〈記載なし〉	2	
109	11月21日	〈記載なし〉	5		133	4月17日	〈記載なし〉	1	
110	12月7日	〈記載なし〉	5		134	6月7日	〈記載なし〉	2	
111	文政12年 3月5日	〈記載なし〉	5	9	135	9月15日	〈記載なし〉	4	
112	6月24日	〈記載なし〉	2		136	10月23日	〈記載なし〉	2	
113	9月21日	〈記載なし〉	2		137	天保5年 2月4日	〈記載なし〉	1	10
114	天保元年 3月10日	〈記載なし〉	3	9	138	9月19日	〈記載なし〉	3	
115	3月24日	〈記載なし〉	2		139	10月3日	〈記載なし〉	3	
116	5月3日	〈記載なし〉	2		140	11月18日	〈記載なし〉	3	
117	11月20日	〈記載なし〉	2		141	天保6年 3月20日	〈記載なし〉	3	8
118	天保2年 4月7日	〈記載なし〉	6	13	142	6月18日	勢州抱	3	
					143	9月25日	勢州抱	2	

第2表 子供の江戸到着記事の
件数・人数（寛政9年～天保9年）

供給元	件数	人数
〈伊勢抱え〉	63	209
〈京抱え〉	17	70
〈記載なし〉	79	228
	159	507

出所) 第1表より作成。

注) 〈伊勢抱え〉は「勢州抱」「勢州勝手」「いせ抱」「勢州より」等の表記を含む。

〈京抱え〉は「京抱」「京勝手」等の表記を含む。

〈記載なし〉79件のうち1件（享和3.8.25）は人数記載なし。

本節で検討したいのは、「永聴記」の江戸到着記事に登場するような、江戸下りの子供は、江戸本店の奉公人のうちのかなりの比率を占めるのかという問題である。これについては、江戸到着記事に現れない子供たちがどの程度存在するかを検討することによって見通しが付けられる。そこでまず「永聴記」から、江戸到着記事以外の、子供の出勤・出店に関する記事を探してみる。管見の限りでは、以下の五件が見出された。これを年代順に示してみる。

二 「永聴記」の半元服記事との照合

#	記事年月日	供給元	人数	1年分 合計	#	記事年月日	供給元	人数	1年分 合計
145	4月3日	勢州抱	5		153	5月26日	京都抱	6	
146	5月5日	〈記載なし〉	1		154	11月25日	勢州勝手	2	
147	5月28日	勢州勝手	3		155	天保9年 4月7日	勢州より	3	18
148	9月11日	〈記載なし〉	4		156	9月17日	京勝手	5	
149	12月7日	勢州抱	6		157	10月1日	勢州勝手	3	
150	天保8年 3月4日	勢州抱	3	14	158	10月4日	勢州勝手	2	
151	3月12日	勢州抱	2		159	10月25日	〈記載なし〉	5	

出所) 「永聴記」(三井文庫所蔵史料 本152, 153)。
注) 「供給元」の「記載なし」は供給元についての記載が無いものを示す。

① (文化四年三月一八日)

一当店勤仕子供中川斧松、当地抱^dニ在之、今日致出店相抱申候

② (文化一〇年五月一三日)

一当店勤仕子供野口松五郎、右者生国幸手ニ有之、中井六兵衛殿口入ニ而致出勤、判元請人見届国分定七参り相済申候

③ (文政一一年一〇月三〇日)

一武州熊谷在大麻生村喜兵衛倅古沢常次郎、芝柴井町越中屋七郎右衛門倅小野巳之吉、右兩人無抛願ニ付、此度召抱申候

④ (天保二年四月四日)

一当店新子供当地抱^e千代田鉄之助、須賀大次郎、鈴木竹次郎、右三人為目見今日より致出勤候

⑤ (天保四年一〇月二七日)

一福井文十郎殿倅文六儀、此度当店為勤仕、今日より出店いたし候

これらのうち①、④に「当地抱」(傍線 d、e)という言葉が用いられていることが注目される。具体的な地名の記載はないが、「当地」とは江戸を指すものであろう。②の野口松五郎は武州幸手、③の古沢常次郎は武州熊谷在、小野巳之吉は江戸柴井町と、いずれも武州または江戸の出身である。⑤も江戸本店元方掛名代である福井文十郎の倅なので江戸出身とみてよい。ここではこれらの者たちを「江戸抱え」としてとらえることにする。

さらに②・③・⑤は、特別の縁故に基づく奉公であることが記されている。②の野口松五郎は、江戸芝口店元^レ役の

中井六兵衛を仲介とする者であり、⑤の福井文六は、先に述べたように江戸本店元方掛名代の子息である。③の古沢常次郎・小野巳之吉も、子細は不明であるが「無抛願」により、江戸本店に召し抱えられている。

以上、「永聴記」からは、江戸到着記事に現れる者以外にも、特別な縁故等に基づいて採用される、江戸や武蔵国出身の〈江戸抱え〉の子供の記事を拾うことができた。ただし、見出された件数は五件と僅少である。

次に検討したのは〈江戸抱え〉の子供は、実際に稀な事例であったのか。それとも「永聴記」に記されたのは例外的な事例のみで、実はほかにも多くの〈江戸抱え〉の子供たちが存在したのかということである。

そこであらためて、「永聴記」の江戸到着記事にあらわれる江戸下りの子供が、江戸本店の奉公人のうちどのくらいの比率を占めるのかについて検討する。これについては、奉公人請状控のような奉公に上がった子供について網羅的に記録した史料があれば、それと「永聴記」の江戸到着記事を照合することによって明らかになる。しかし江戸本店にはそのような史料は現存しない。

これを代替する次善の方法としては、以下のような手だてが考えられる。すなわち江戸本店の奉公人について、ある職階に昇進した者のリストを一定期間分準備し、それと「永聴記」の子供の到着記事を照合するというものである。その作業の結果により、厳密な形ではないが、江戸本店の子供のうち江戸下りの者が占める比率を推測することができる。ここで問題になるのは、どの職階で昇進者のリストが作れるかということである。なるべくならば奉公開始から年数が経過していない職階でのリストが望ましい。着目したいのは「永聴記」のなかの半元服の記事である。半元服は本元服に先立つもので、入店した子供にとっては昇進過程の第一段階である。江戸本店の場合、入店後二〜三年たった子供を対象に申し渡される。「永聴記」には年に二度、七月と一二月に、本元服・半元服の申渡しの記事がみられる。次の史料はその例を示すもので、寛政十一年（一七九九）七月五日付の記事である。

(寛政一二年七月五日)

一夜前惣寄会之上、元服申渡候所、左之通

勝永七三郎、内田四郎松、西川安吉

本元服 岡村六次郎、角ノ藤三郎、西浦惣四郎

池村彦吉、西山岩之助

ズ八人

f 森田佐吉、御子菊松、辻亀次郎

半元服 堀田吉五郎、坂本吉松、山川小吉

渡辺彦一、小川久之助、永福与四郎

沢木辰次郎、山崎小三郎

ズ十一人

七月四日夜の惣寄会において、勝永七三郎以下八人に対して本元服が申し渡され、また森田佐吉(傍線 f) 以下一人に対して半元服が申し渡されている。ちなみに森田佐吉は、第一節に掲げた寛政九年(一七九七)二月一三日の江戸到着記事にあらわれた森田佐吉と同一人物と推測される。

第3表は「永聴記」の半元服の記事をもとに、寛政九年(一七九七)から天保九年(一八三八)までに、半元服が命ぜられた者の人数を記したものである。この四二年(八四季)の間に、本元服・半元服の申渡しが記されているのは五

第3表 江戸本店における半元服者の人数

年 月	本元服	半元服	第4表
寛政9年7月	7	11	
寛政9年12月	9	6	
寛政10年7月	—	—	
寛政10年12月	5	3（名字無し）	
寛政11年7月	8	11	①
寛政11年12月	5	10	
寛政12年7月	7	8	
寛政12年12月	4	7	
享和元年7月	3	7	
享和元年12月	6	9	
享和2年7月	—	—	
享和2年12月	6	5（名字無し）	
享和3年7月	7	12（名字無し）	
享和3年12月	7	3（名字無し）	
文化元年7月	—	—	
文化元年12月	—	—	
文化2年7月	—	—	
文化2年12月	—	—	
文化3年7月	—	—	
文化3年12月	—	—	
文化4年7月	—	—	
文化4年12月	6	9	
文化5年7月	2	11	②
文化5年12月	3	7	
文化6年7月	2	7	
文化6年12月	5	5	
文化7年7月	6	8	
文化7年12月	5	12	
文化8年7月	6	5	
文化8年12月	—	—	
文化9年7月	—	—	
文化9年12月	4	5	
文化10年7月	5	12（名字無し）	
文化10年12月	—	—	
文化11年7月	—	—	
文化11年12月	—	—	

六季で、本元服が二九九人、半元服が三九六人である。この表をみてわかるように「永聴記」の半元服の記事は、網羅的に残っているわけではない。四二年八四季のうち二八季については、本元服・半元服申渡しの記事が欠けている。実際に、申渡しがなされなかった可能性もある。しかし、例えば文化元年（一八〇四）七月から文化四年七月まで三年半にわたり記録がないが、実際にこの期間中に本元服・半元服の申渡しは一切なかったということは考え難いので、「永聴記」に記録がなされなかったとみるべきだろう。さらにまた具合の悪いことに、「永聴記」の半元服の申渡しの記事五六件のうち一二件は申し渡された者の名前のうち名字が記されていない。名字が無い場合、到着記事にあらわれる子供との照合がきわめて困難になる。¹⁾

年 月	本元服	半元服	第4表
文化12年7月	—	—	
文化12年12月	—	—	
文化13年7月	—	—	③
文化13年12月	7	6	
文化14年7月	5	4	
文化14年12月	4	6	
文政元年7月	12	8	
文政元年12月	—	—	
文政2年7月	4	4 (名字無し)	④
文政2年12月	—	—	
文政3年7月	8	8	
文政3年12月	—	—	
文政4年7月	8	7 (名字無し)	
文政4年12月	6	11 (名字無し)	
文政5年7月	5	8 (名字無し)	
文政5年12月	4	5 (名字無し)	
文政6年7月	4	6 (名字無し)	
文政6年12月	8	8 (名字無し)	
文政7年7月	2	9	
文政7年12月	6	7	
文政8年7月	5	11	
文政8年12月	—	—	
文政9年7月	—	—	
文政9年12月	5	6	
文政10年7月	4	4	
文政10年12月	5	8	
文政11年7月	—	—	
文政11年12月	10	6	
文政12年7月	4	5	
文政12年12月	—	—	
文政13年7月	7	6	
文政13年12月	—	—	
天保2年7月	5	9	
天保2年12月	6	8	
天保3年7月	7	7	
天保3年12月	5	6	
天保4年7月	—	—	

そこで、本稿では、「永聴記」において名字を含めて名前が記載されていて、ある程度継続して半元服記事が残っている期間に限定して、半元服者と江戸到着記事の照合作業を行う。具体的には四季(二年)以上、連続して半元服記事が載っている五つの期間(第3表網掛け部分)を抽出して半元服者のリストをつくり、子供の江戸到着記事と対照させ、同一人物とみなすことができる人物について、その名前と江戸到着の時期について記した。その結果をまとめたのが第4表①から⑤までの五つの表である。

これらの五つの期間について、それぞれ半元服者の人数と、そのうち江戸到着記事と対照できる者の人数は以下のようになる。

年 月	本元服	半元服	第4表
天保4年12月	3	7	⑤
天保5年7月	3	7	
天保5年12月	4	4	
天保6年7月	7	8	
天保6年12月	6	9	
天保7年7月	5	9	
天保7年12月	4	5	
天保8年7月	3	1	
天保8年12月	—	—	
天保9年7月	—	—	
天保9年12月	—	—	

出所)「永聴記」(三井文庫所蔵史料 本152, 153)。

注)「—」は記事なし。本元服の人数に仮元服等は含まない。

- ① 寛政一一年(一七九九)七月、享和元年(一八〇二)一二月
五二人中 四五人(八六・五パーセント)
- ② 文化五年(一八〇八)一二月、文化八年(一八一二)七月
四四人中 三五人(七九・五パーセント)
- ③ 文化二三年(一八一六)一二月、文政元年(一八一八)七月
二四人中 二二人(九一・七パーセント)
- ④ 天保二年(一八三二)七月、天保三年(一八三三)一二月
三〇人中 二四人(八〇・〇パーセント)
- ⑤ 天保四年(一八三三)一二月、天保八年(一八三七)七月
五〇人中 四三人(八六・〇パーセント)

事と対照できる者は一六九人で、その比率は八四・五パーセントになる。五つの期間を合計すると、半元服者は二〇〇人、そのうち江戸到着記

それでは、対応する江戸到着記事がみられない半元服者については、どのような事情が考えられるか。

第一に、その者が江戸に下って来たのではなく、〈江戸抱え〉である場合が考えられる。実際、天保二年(一八三二)七月の小野巳之吉(第4表④)、天保四年(一八三三)二月の鈴木竹二郎(第4表⑤)、天保七年七月の福井文六(同)は、先に史料を掲げたように「永聴記」に入店時の記事があり、〈江戸抱え〉に該当する。彼ら以外にも〈江戸抱え〉が存在する可能性はある。

第二には、江戸到着から半元服までの間に、名字を含めて改名した場合が考えられる。

第4表① 半元服と子供江戸到着記事の対照
(寛政11年7月～享和元年12月)

半元服		江戸到着			
年月	名前	年月	名前	供給元	
寛政11年7月	森田佐吉	寛政9年2月	森田佐吉	〈伊勢抱え〉	
	御子菊松				
	辻亀次郎				
	堀田吉五郎				
	坂本吉松		寛政9年3月	坂本吉松	〈伊勢抱え〉
	山川小吉		寛政9年3月	山川小吉	〈伊勢抱え〉
	渡辺彦一		寛政9年4月	渡辺富之助	〈京抱え〉
	北川久之助		寛政9年4月	北川与惣松	〈京抱え〉
	永福与四郎		寛政9年4月	永福与四郎	〈京抱え〉
	沢木辰次郎		寛政9年5月	沢木辰次郎	〈記載なし〉
山崎小三郎	寛政9年6月	山崎巳三郎	〈記載なし〉		
寛政11年12月	野中藤之助	寛政9年8月	白井亀之助	〈伊勢抱え〉	
	白井善之助				
	河合善藏				
	桂山三之助		寛政9年9月	桂山三之丞	〈伊勢抱え〉
	桑原和次郎		寛政9年9月	桑山松次郎	〈伊勢抱え〉
	浦和松之助		寛政9年9月	浦和松之助	〈伊勢抱え〉
	河村源四郎				
	上村友次郎		寛政9年10月	上村藤次郎	〈伊勢抱え〉
西村長之助	寛政9年8月	西村種五郎	〈伊勢抱え〉		
西山市之助	寛政9年10月	西山鹿之助	〈伊勢抱え〉		
寛政12年7月	谷亀三郎	寛政10年2月	谷亀次郎	〈伊勢抱え〉	
	滝本友五郎	寛政10年2月	滝本友藏	〈伊勢抱え〉	
	島地栄藏	寛政10年2月	島地栄藏	〈伊勢抱え〉	
	塩崎林之助	寛政10年2月	塩崎林藏	〈伊勢抱え〉	
	前田弥市	寛政10年2月	前田弥太郎	〈伊勢抱え〉	
	藤方次郎	寛政10年2月	藤方秀三郎	〈伊勢抱え〉	
	松田勘四郎	寛政10年3月	松田嘉太郎	〈伊勢抱え〉	
	小田勘四郎	寛政10年3月	小田勘四郎	〈伊勢抱え〉	
寛政12年12月	吉田勇次郎	寛政10年5月	吉田勇次郎	〈京抱え〉	
	上田久次郎	寛政10年5月	上田久三郎	〈京抱え〉	
	西村常次郎	寛政10年5月	西村常次郎	〈京抱え〉	
	西村孫吉	寛政10年5月	西村孫吉	〈京抱え〉	
	下倉常吉	寛政10年5月	上倉常吉	〈伊勢抱え〉	
	福田直之助	寛政10年5月	福田直之助	〈伊勢抱え〉	
	増田奥次郎	寛政10年5月	増田奥次郎	〈伊勢抱え〉	
享和元年7月	寺田善太郎	寛政10年5月	寺田善之助	〈京抱え〉	
	浦田常七	寛政10年10月	浦田藤次郎	〈伊勢抱え〉	
	森惣太郎	寛政10年10月	森藤三郎	〈伊勢抱え〉	

越後屋江戸本店子供の供給元について（西坂）

半 元 服		江 戸 到 着		
	牧野富吉 脇田源太郎 田所伊三吉 辻勘三郎	寛政10年10月 寛政11年2月 寛政11年2月 寛政11年3月	牧野留吉 脇田源次郎 田所伊三郎 辻勘藏	<伊勢抱え> <伊勢抱え> <伊勢抱え> <伊勢抱え>
享和元年12月	小林林次郎 宮崎久太郎 堀江為吉 山咲勇藏 荒木虎吉 高野小次郎 田中佐次郎 佐々木吉三郎 高木市太郎	寛政11年3月 寛政11年3月 寛政11年3月 寛政11年4月 寛政11年4月 寛政11年4月 寛政11年4月 寛政11年4月 寛政11年4月	宮崎久次郎 堀江勇藏 山崎為吉 荒木虎吉 高野小次郎 田中佐次郎 佐々木吉三郎 高木市太郎	<伊勢抱え> <伊勢抱え> <伊勢抱え> <京抱え> <京抱え> <京抱え> <京抱え> <京抱え> <京抱え>

第4表② 半元服と子供江戸到着記事の対照
(文化5年12月～文化8年7月)

半 元 服		江 戸 到 着		
年 月	名 前	年 月	名 前	供給元
文化5年12月	森本新次郎 中邑総太郎 松田長之助 中川斧松 川本竹次郎 西田藤五郎 村田鉄五郎			(江戸) <記載なし> <記載なし> <記載なし>
文化6年7月	松野太三郎 渋谷卯之吉 渋谷千之助 渋谷戸三郎 和田乙松 伊阪岩三郎 馬淵幸次郎	文化4年3月 文化4年4月 文化4年4月 文化4年4月 文化4年4月 文化4年4月 文化4年4月	川本竹次郎 西田藤五郎 村田鉄五郎 松野太三郎 渋谷卯之吉 森田千之助 渋谷戸三郎 和田乙松 井坂岩三郎 馬淵幸次郎	<記載なし> <記載なし> <記載なし> <記載なし> <記載なし> <記載なし> <記載なし> <記載なし> <記載なし>
文化6年12月	須藤□次郎 早野与五郎 早野豊次郎 山本忠之助 山本清三郎	文化4年11月 文化4年11月 文化4年11月 文化4年11月	早野与五郎 早野豊次郎 山本元吉 山本源藏	<記載なし> <記載なし> <記載なし> <記載なし>
文化7年7月	岡本万介 坂くら万次郎 小林甚藏 川端富五郎	文化5年3月 文化5年3月 文化5年3月 文化5年3月	岡本万助 坂倉万次郎 小林甚之助 川端富五郎	<伊勢抱え> <伊勢抱え> <伊勢抱え> <伊勢抱え>

半 元 服		江 戸 到 着		
	西村秀五郎 西井捨五郎 大久保十次郎 脇坂鉄三郎	文化5年3月	西村秀五郎	〈伊勢抱え〉
		文化5年6月	脇坂鉄三郎	〈京抱え〉
文化7年12月	山本吉六 村林銀次郎 芝山善蔵 福井彦五郎 多田作之介 森内藤吉 北村徳五郎 近藤常吉 岩上又吉 松本金五郎 依田伝三郎 奥野太次郎	文化5年5月	山本吉六	〈伊勢抱え〉
		文化5年5月	村林銀次郎	〈伊勢抱え〉
		文化5年6月	芝山善蔵	〈京抱え〉
		文化5年6月	福井彦五郎	〈京抱え〉
		文化5年10月	森内藤吉	〈記載なし〉
		文化5年10月	北村徳五郎	〈記載なし〉
		文化5年10月	近藤常吉	〈記載なし〉
		文化5年10月	岩上又吉	〈記載なし〉
		文化5年10月	松本金五郎	〈記載なし〉
		文化5年10月	寄田伝三郎	〈記載なし〉
文化8年7月	佐藤利三郎 岡本嘉吉 奥井三四郎 久留目熊次郎 一色亀吉	文化5年6月	佐藤利三郎	〈京抱え〉
		文化6年2月	奥井三四郎	〈伊勢抱え〉
		文化6年2月	久留目熊次郎	〈伊勢抱え〉
		文化6年2月	一色亀吉	〈伊勢抱え〉

第4表③ 半元服と子供江戸到着記事の対照
(文化13年12月～文政元年7月)

半 元 服		江 戸 到 着		
年 月	名 前	年 月	名 前	供給元
文化13年12月	森栄吉 奥野惣蔵 中津万次郎 山路市松 小林庄蔵 大塚伊之助	文化11年10月	奥野惣蔵	〈伊勢抱え〉
		文化11年10月	中津万吉	〈伊勢抱え〉
		文化12年2月	山路市松	〈伊勢抱え〉
		文化12年2月	小林庄蔵	〈伊勢抱え〉
文化14年7月	中西惣吉 西岡弥五郎 坂村又次郎 須田伊三吉	文化12年4月	中西惣吉	〈伊勢抱え〉
		文化12年4月	西岡弥五郎	〈伊勢抱え〉
		文化12年4月	坂村又次郎	〈伊勢抱え〉
		文化12年4月	須田伊三吉	〈伊勢抱え〉
文化14年12月	飯田三之助 大野富之助 辻平吉 南菊太郎 池田勇三郎	文化12年9月	飯田之丞	〈伊勢抱え〉
		文化12年9月	大野富之助	〈伊勢抱え〉
		文化12年9月	辻平吉	〈伊勢抱え〉
		文化12年9月	南菊太郎	〈伊勢抱え〉
		文化12年9月	池田祐次郎	〈伊勢抱え〉

越後屋江戸本店子供の供給元について（西坂）

半 元 服		江 戸 到 着		
	小林梅次郎	文化12年9月	小林梅次郎	〈伊勢抱え〉
文政元年7月	長井為次郎	文化12年11月	長井為次郎	〈伊勢抱え〉
	大西文次郎	文化12年11月	大西文三郎	〈伊勢抱え〉
	梶木辰吉	文化12年11月	堀木辰吉	〈伊勢抱え〉
	草野甚七	文化12年12月	草野甚吉	〈京抱え〉
	橋本卯之助	文化12年12月	橋本卯之助	〈京抱え〉
	富田幸次郎	文化12年12月	富田幸次郎	〈伊勢抱え〉
	南出岩吉	文化13年3月	南出岩吉	〈伊勢抱え〉
	中津吉太郎	文化13年3月	中津吉五郎	〈伊勢抱え〉

第4表④ 半元服と子供江戸到着記事の対照
 (天保2年7月～天保3年12月)

半 元 服		江 戸 到 着		
年 月	名 前	年 月	名 前	供給元
天保2年7月	小野巳之吉			(江戸)
	金岩新之助	文政11年11月	金岩新吉	〈記載なし〉
	藤井小次郎	文政11年11月	藤井小作	〈記載なし〉
	小柴伊之助	文政11年11月	小柴伊三郎	〈記載なし〉
	奥野勝五郎			
	広村清太郎	文政11年12月	広村清三郎	〈記載なし〉
	榊原長吉	文政11年12月	榊原菊次郎	〈記載なし〉
	西村七之助	文政11年12月	西村寅藏	〈記載なし〉
	清水吉之助	文政11年12月	清水徳之助	〈記載なし〉
	天保2年12月	北村丑之介	文政12年3月	北村丑之助
井坂新次郎		文政12年3月	井坂藤吉	〈記載なし〉
北出茂吉		文政12年3月	北出茂吉	〈記載なし〉
中谷長之介		文政12年3月	中谷長之介	〈記載なし〉
田垣惣太郎		文政12年3月	田垣良三郎	〈記載なし〉
高木多次郎		文政12年6月	高木多次郎	〈記載なし〉
高木栄太郎		文政12年6月	高木栄次郎	〈記載なし〉
岡村甚三郎		文政12年9月	岡村甚三郎	〈記載なし〉
天保3年7月	坂井久之介	天保元年3月	坂井久之助	〈記載なし〉
	村林乙吉	天保元年3月	村林乙吉	〈記載なし〉
	橋巳之介	天保元年3月	橋巳之助	〈記載なし〉
	幸治三之介	天保元年3月	幸治定三郎	〈記載なし〉
	荒木庄次郎	天保元年3月	荒木庄太郎	〈記載なし〉
	西野惣次郎	天保元年5月	西野惣次郎	〈記載なし〉
	西野鉄五郎	天保元年5月	西野鉄次郎	〈記載なし〉
天保3年12月	渋谷勘藏			
	榎木徳次郎 高野清之助			

半元服		江戸到着		
	川端新太郎 南長松 大井多吉	天保元年11月 天保元年11月	川端新吉 南長之助	<記載なし> <記載なし>

第4表⑤ 半元服と子供江戸到着記事の対照
(天保4年12月～天保8年7月)

半元服		江戸到着		
年月	名前	年月	名前	供給元
天保4年12月	鈴木竹次郎			(江戸)
	西岡寅次郎	天保2年5月	西岡寅次郎	<記載なし>
	黒瀬松五郎	天保2年5月	黒坂松五郎	<記載なし>
	須川喜之助	天保2年10月	須川愛之助	<記載なし>
	宮田久太郎	天保2年10月	宮田久太郎	<記載なし>
	大西梅吉 岡平三郎	天保2年10月 天保2年10月	大西梅吉 岡平三郎	<記載なし> <記載なし>
天保5年7月	村木松次郎	天保2年10月	村木松次郎	<記載なし>
	野呂佐次郎 清水作次郎			
	中村平吉 中川弥吉	天保3年4月 天保3年4月	中村角松 中川弥三郎	<記載なし> <記載なし>
	最上寅吉 村上小三郎	天保3年4月	村上小次郎	<記載なし>
天保5年12月	鈴木嘉十郎	天保3年5月	鈴木嘉十郎	<記載なし>
	藤本喜太郎	天保3年6月	藤本喜三郎	<記載なし>
	高橋亀吉	天保3年6月	高橋亀吉	<記載なし>
	太田与吉	天保3年7月	太田与吉	<記載なし>
天保6年7月	山本政吉	天保3年9月	山本政吉	<記載なし>
	矢田栄吉	天保3年9月	矢田栄吉	<記載なし>
	春日忠之介	天保3年9月	春日忠太郎	<記載なし>
	渡辺伊之助	天保3年9月	渡辺民蔵	<記載なし>
	佐野浅次郎	天保3年9月	佐野浅次郎	<記載なし>
	児玉幸之介	天保3年9月	児玉斧次郎	<記載なし>
	児玉卯之介	天保3年9月	児玉注連五郎	<記載なし>
	重村常太郎	天保3年9月	重村常次郎	<記載なし>
天保6年12月	真野辰三郎	天保3年10月	真野辰三郎	<記載なし>
	増木辰五郎	天保3年10月	増本辰五郎	<記載なし>
	芝原辰之介	天保3年10月	芝原辰之介	<記載なし>
	中村忠次郎			
	藤原栄次郎	天保4年3月	藤原栄次郎	<記載なし>
	森田幸太郎 渡辺政次郎	天保4年3月 天保4年3月	芝山幸太郎 渡辺喜市	<記載なし> <記載なし>

半 元 服		江 戸 到 着		
	村田伝之介 岡田政太郎	天保4年3月	村田伝三郎	<記載なし>
		天保4年3月	岡田佐吉	<記載なし>
天保7年7月	三田清六 西谷彦次郎 香村専次郎 松田乙松 丹羽文之助 川本庄太郎 植村由之助 辻梅太郎 福井文六	天保4年4月	三田清吉	<記載なし>
		天保4年6月	西谷彦次郎	<記載なし>
		天保4年6月	香村千次郎	<記載なし>
		天保4年9月	松田音松	<記載なし>
		天保4年9月	丹羽助之丞	<記載なし>
		天保4年9月	川本喜三太	<記載なし>
		天保4年9月	植村吉三郎	<記載なし>
		天保4年10月	辻梅吉	<記載なし> (江戸)
天保7年12月	小出重之助 国本十三郎 鈴木卯三郎 魚住民三郎 桑原七之助	天保5年2月	小出金之助	<記載なし>
		天保5年9月	国本徳三郎	<記載なし>
		天保5年10月	魚住新太郎	<記載なし>
		天保5年10月	桑原七太郎	<記載なし>
天保8年7月	野口平五郎	天保6年3月	野口十次郎	<記載なし>

出所)「永聴記」(三井文庫所蔵史料 本152, 153)。

第三には、実際に江戸に下って来たにも関わらず、その事実が「永聴記」に記録されなかった場合である。実際にはこれが最も多かったものと推測される³⁾。

以上、本節では、「永聴記」から、五つの時期について半元服者のリストをつくり、そのリストに現れる八割以上の者が、江戸到着記事に現れていたこと確認した。これにより江戸本店の子供の大方の部分は、江戸到着記事に現れる江戸下りの子供、すなわち「伊勢抱え」か「京抱え」によって占められていると言えよう。

(1) 江戸本店「厚勤録」(三井文庫所蔵史料 本一五〇三〜一五〇九)には、半年ごとに子供一人一人の勤怠状況が記録されている。しかし名字が記載されていないため、次の半元服の子供との対照がむずかしく、この史料から「永聴記」の子供の江戸到着記事と対照させることができるような新入りの子供のリストを作成することは困難である。

(2) 名字が同一または一文字違いで、江戸到着が同時期のグループに含まれていれば、個人名の部分が異なっても

同一人物とみなした(第5表も同様)。

(3) 寛政九年(一七九七)から天保九年(一八三八)までの四二年の間の江戸本店の到着子供の数は五〇七人で、一年当たりでは一二・一人になるが、これをそのまま実際の新規入店子供の人数とみなすには不都合な点がある。

一つは、京本店の子供の人数との比較である。天保一年(一八四〇)のデータで比較すると、江戸本店には六四人の子供がおり、京本店の子供は四一人で、京本店の方が少ない(『三井事業史 本篇一』第五章・第5-9表)。一方、京本店では寛政九年(一七九七)から天保九年(一八三八)までの間に五四四人の子供が入店している(西坂『三井越後屋奉公人の研究』第4章・第1表より計算)。この人数は、同期間の江戸本店の到着記事にあらわれる子供の人数五〇七人を上回っている。両店の奉公人の量的規模を考えると、江戸本店の子供人数の方が少ないのは不自然である。

もうひとつは、江戸本店における半元服の人数の推測値との比較である。「永聴記」では、寛政九年(一七九七)から天保九年(一八三八)までの四二年・八四季のうち、五五季に半元服の記事があり、三九六人が記載されている。一季当たり七・二人であり、一年当たりに換算すると一四・四人となる。この人数は、江戸本店の到着記事に現われる子供の、一年当たりの人数一二・一人を上回っている。

これらから考えると、江戸本店の子供の到着記事にあらわれる五〇七人をそのまま江戸本店の新規入店の子供の数とみなすのは不自然である。到着記事として記載されなかった事例が存在し、これにより、実際の人数は五〇七人より多かったものと推測される。

三 「江戸本店手代子供請状」との照合

第一節において検討したように、「永聴記」には、寛政九年(一七九七)から天保九年(一八三八)までの四二年の間に、江戸に下って来た子供五〇七人が記されている。この供給元に着目すると、〈伊勢抱え〉が二〇九人、〈京抱え〉

が七〇人、〈記載なし〉が二一八人であった。このうち〈記載なし〉の者たちについては、実際は〈伊勢抱え〉か〈京抱え〉のいずれかであると推測した。本節では〈記載なし〉に占める〈伊勢抱え〉と〈京抱え〉の比率について検討したい。

ここで着目するのは、京本店が作成した「江戸本店手代子供請状」二番⁽¹⁾という史料である。先に江戸本店には奉公人を網羅的に記載するような奉公人請状の控がないと述べたが、「江戸本店手代子供請状」は〈京抱え〉の奉公人に限定した請状の控である。すなわち京本店で抱えられ、江戸本店で勤務するため江戸に下った者たちが記録されている。ちなみに京本店が作成した請状の控帳には、似た名前の「京本店手代子供請状」⁽²⁾がある。これは京本店の店表奉公人について請状番号をつけて整理したもので、京本店に奉公に上がった子供を網羅している。「江戸本店手代子供請状」も同様の形で、江戸本店に下った〈京抱え〉の子供を網羅的に記録した史料であるととらえ、それを前提に検討を進めることにする。

この「江戸本店手代子供請状」二番には、寛延三年（一七五〇）から天保一三年（一八四二）までの九三年間に、三九一人が記されている。これらの者たちには、四六〇番から八四九番までの請状の整理番号が付されている（番号無しが一人いる）。ちなみにこの帳簿自体には二番という番号がついており、請状番号が四六〇番から始まっていることから考えても、寛延三年以前について記録した帳簿（Ⅱ一番）があったはずである。しかし、これは現存していない。

さて第5表は、「永聴記」の子供江戸到着記事が残っている期間、すなわち寛政九年（一七九七）から天保九年（一八三八）までの四二年の期間に限定して、「江戸本店手代子供請状」二番に記載された子供と「永聴記」の江戸到着記事を照合させたものである。

この期間中「江戸本店手代子供請状」二番には、請状番号七四一から八四五までの一〇五人と、番号無しの一人を合

政9年～天保9年)

到着記事	
名前	供給元
渡辺富之助	〈京抱え〉
北川与惣松	〈京抱え〉
永福与四郎	〈京抱え〉
長沢万吉	〈京抱え〉
吉田勇次郎	〈京抱え〉
寺田善之助	〈京抱え〉
上田久三郎	〈京抱え〉
西村常次郎	〈京抱え〉
西村孫吉	〈京抱え〉
大西友吉	〈京抱え〉
西浦平藏	〈京抱え〉
荒木寅吉	〈京抱え〉
高野小次郎	〈京抱え〉
田中佐次郎	〈京抱え〉
佐々木吉三郎	〈京抱え〉
高木市太郎	〈京抱え〉
7名 (名前なし)	〈京抱え〉
早野与五郎	〈記載なし〉
早野豊次郎	〈記載なし〉

わせて一〇六人が記載されている。このうち再勤の手代など子供ではない者が五人いる(請状番号七四一・七八三・七八六・八二六・八三一)。これらを除く一〇一人を検討対象とする。第5表では、これらについて請状番号・名前・年齢・親元・江戸に向けて出立した日付を記した。そして、これに対応する「永聴記」の江戸到着記事の日付・名前・供給元の区分を記した。

「江戸本店手代子供請状」二番と「永聴記」の子供の江戸到着記事を照合する作業をおこなった結果、検討対象とした一〇一人のうち「永聴記」において対応する江戸到着記事を見いだせた者は八九人であった。比率にして八八パーセントになる。

その八九人のうち七〇人は供給元が〈京抱え〉となっている(享和三年六月八日の記事の名前不明の七人を含む)。ちなみに第2表で示したように、「永聴記」の江戸到着記事において〈京抱え〉とされた子供は七〇人であり、これらすべて「江戸本店手代子供請状」二番のなかで確認することができた。

八九人のうち残り一九人は、「永聴記」の子供江戸到着記事においては、供給元が記されない(記載なし)であった。つまり〈記載なし〉に分類された者のうちに、実際は〈京抱え〉だった者が一九人含まれていたことがわかる。

第5表 「江戸本店手代子供請状」と「永聴記」子供江戸到着記事の対照（寛

#	「江戸本店手代子供請状」					「永聴記」子供江戸	
	請状 番号	名 前	年齢	親元	江戸下り	第1表	江戸着
1	741	青木伝四郎 *1	不明	近江	寛政9.3.22		
2	742	渡辺富之助	12	近江	寛政9.3.22	3	寛政9.4.8
3	743	北川与惣松	14	近江	寛政9.3.22	3	寛政9.4.8
4	744	永福与四郎	12	近江	寛政9.3.22	3	寛政9.4.8
5	745	長沢万吉	12	山城	寛政9.3.22	3	寛政9.4.8
6	746	吉田勇次郎	14	近江	寛政10.4.25	11	寛政10.5.9
7	747	寺田善之助	12	近江	寛政10.4.25	11	寛政10.5.9
8	748	上田桑三郎	14	京都	寛政10.4.25	11	寛政10.5.9
9	749	西村常次郎	13	近江	寛政10.4.25	11	寛政10.5.9
10	750	西村孫吉	14	近江	寛政10.4.25	11	寛政10.5.9
11	751	大西友吉	14	京都	寛政10.4.25	11	寛政10.5.9
12	752	西浦平蔵	13	伊勢	寛政11.4.12	17	寛政11.4.23
13	753	荒木虎吉	13	伊賀	寛政11.4.12	17	寛政11.4.23
14	754	高野小太郎	(12)	美濃	寛政11.4.12	17	寛政11.4.23
15	755	田中佐次郎	12	京都	寛政11.4.12	17	寛政11.4.23
16	756	佐々木吉三郎	12	京都	寛政11.4.12	17	寛政11.4.23
17	757	高木市太郎	13	京都	寛政11.4.12	17	寛政11.4.23
18	758	富田竹次郎	13	美濃	享和3.5.23	29	享和3.6.8
19	759	山野専次郎	13	近江	享和3.5.23		
20	760	江籠米之助	12	近江	享和3.5.23		
21	761	堀田文吉	13	近江	享和3.5.23		
22	762	丸本要次郎	13	近江	享和3.5.23		
23	763	三宅長四郎	13	京都	享和3.5.23		
24	764	長沢富三郎	12	山城	享和3.5.23		
25	765	若山茂吉	(11)	京都	(享和2.12.6)		(到着記事なし)
26	766	高山万次郎	(12)	京都	(享和3.閏1.20)		(到着記事なし)
27	767	仲忠次郎	(14)	京都	(享和3.12.19)		(到着記事なし)
28	768	加々爪安五郎	(15)	近江	(文化1.3.13)		(到着記事なし)
29	769	芝田為次郎	(12)	近江	(文化1.4.15)		(到着記事なし)
30	770	田中富松	(12)	近江	(文化1.6.14)		(到着記事なし)
31	771	近藤吉次郎	(13)	美濃	(文化1.6.14)		(到着記事なし)
32	772	長江万三郎	(12)	美濃	(文化1.6.14)		(到着記事なし)
33	773	小寺為之助	(12)	美濃	(文化1.10.9)		(到着記事なし)
34	無番	伊藤佐五郎	12	近江	(文化2.9.10)		(到着記事なし)
35	774	中島忠次郎	12	近江	文化3.10		(到着記事なし)
36	775	鈴木音吉	12	大和	文化3.10		(到着記事なし)
37	776	早野与五郎	12	美濃	文化4.10.20	38	文化4.11.6
38	777	早野豊次郎	12	美濃	文化4.10.20	38	文化4.11.6

先に「永聴記」の子供江戸到着記事のうち〈記載なし〉二二十八人(第2表参照)については、実際には〈伊勢抱え〉〈京抱え〉のいずれかであるものと推測した。ここでの検討から、供給元の〈記載なし〉二二十八人のうち一人については実際には〈京抱え〉であることがわかった。そうであれば、〈記載なし〉の残り二〇九人については、実際は〈伊勢抱え〉であったと考えることができよう。⁽³⁾この推測が成り立つとすれば、寛政九年(一七九七)から天保九年(一八三八)までの四二年の間の「永聴記」の到着記事に現われる子供五〇七人については、実際の〈伊勢抱え〉が四一八人(うち〈記載なし〉二〇九人)に対し、実際の〈京抱え〉が八九人(うち〈記載なし〉一九人)となる。百分率にする⁽⁴⁾と、実際の〈伊勢抱え〉が八二・四パーセントに対し、実際の〈京抱え〉が一七・六パーセントとなる。

一方、「江戸本店手代子供請状」二番で検討対象とした一〇一人のうち「永聴記」において対応する江戸到着記事を見いだせなかった者は二人であった。これは請状番号七六五から七七五まで、年次でいうと享和三年(一八〇三)五月以降、文化四年(一八〇七)一〇月以前の期間に集中している。この二人について「江戸本店手代子供請状」の原簿である京本店の「奉公人抱帳」⁽⁵⁾と照らし合わせてみると、いずれも江戸に下されたことを示す記述が確認できる。すなわち、七六五番と七六九番の五人は「文化元年子五月江戸本店勤申渡」、七七〇番と七七三番の四人は「文化二丑四

脇坂鉄三郎	〈京抱え〉
西村吉三郎	〈京抱え〉
芝山善蔵	〈京抱え〉
佐藤利三郎	〈京抱え〉
福井彦五郎	〈京抱え〉
井狩弥之助	〈京抱え〉
森岡亀松	〈京抱え〉
吉田竹次郎	〈京抱え〉
福井彦吉	〈京抱え〉
清水猶次郎	〈京抱え〉
野瀬熊吉	〈京抱え〉
今井猶蔵	〈記載なし〉
元持清五郎	〈記載なし〉
西村源吉	〈記載なし〉
高井久次郎	〈京抱え〉
吹田虎吉	〈京抱え〉
安井熊次郎	〈京抱え〉
橋本亀蔵	〈京抱え〉
松原市蔵	〈京抱え〉
松島万之介	〈京抱え〉
大橋善介	〈京抱え〉
東治郎吉	〈京抱え〉
山本熊吉	〈京抱え〉
草野甚吉	〈京抱え〉
橋本卯之助	〈京抱え〉
水野源三郎	〈京抱え〉
寺崎善次郎	〈京抱え〉
高木脇三郎	〈京抱え〉
崎山又吉	〈京抱え〉
西野亀吉	〈京抱え〉
岩田伝三郎	〈京抱え〉
小野幸吉	〈京抱え〉
徳永文吉	〈京抱え〉
中田熊吉	〈京抱え〉
三宅九蔵	〈京抱え〉
塚永音吉	〈京抱え〉
岡崎秀三郎	〈京抱え〉
中西利之助	〈京抱え〉

越後屋江戸本店子供の供給元について（西坂）

#	「江戸本店手代子供請状」					「永聴記」子供江戸	
39	778	脇坂鉄次郎	15	近江	文化5.5.24	42	文化5.6.8
40	779	西村吉三郎	13	京都	文化5.5.24	42	文化5.6.8
41	780	芝山鍋藏	14	美濃	文化5.5.24	42	文化5.6.8
42	781	佐藤三次郎	13	美濃	文化5.5.24	42	文化5.6.8
43	782	福井馬之助	12	近江	文化5.5.24	42	文化5.6.8
44	783	田畑正助 * 2	不明	京都	(文化5.4)		
45	784	井狩弥次郎	(14)	近江	文化6.4.11	46	文化6.4.21
46	785	森岡亀松	12	近江	文化6.4.11	46	文化6.4.21
47	786	平井定七 * 3	不明	京都	(享和3)		
48	787	吉田竹次郎	13	近江	文化8.9.7	51	文化8.9.18
49	788	福井音吉	13	山城	文化8.9.7	51	文化8.9.18
50	789	清水猶吉	12	美濃	文化8.9.7	51	文化8.9.18
51	790	野瀬熊吉	12	近江	文化8.9.7	51	文化8.9.18
52	791	今井猶藏	14	近江	文化9.9.11	52	文化9.9.22
53	792	元持清五郎	11	近江	文化9.9.11	52	文化9.9.22
54	793	西村源吉	(12)	近江	文化9.9.11	52	文化9.9.22
55	794	高井久次郎	(12)	山城	文化10.10.21	54	文化10.11.2
56	795	吹田虎吉	(12)	京都	文化10.10.21	54	文化10.11.2
57	796	安井熊次郎	(12)	京都	文化10.10.21	54	文化10.11.2
58	797	橋本亀藏	11	近江	文化11.8.8	55	文化11.8.19
59	798	松原市藏	13	山城	文化11.8.8	55	文化11.8.19
60	799	松島万之助	(12)	山城	文化11.8.8	55	文化11.8.19
61	800	大橋善吉	12	近江	文化11.8.8	55	文化11.8.19
62	801	東治三郎	12	近江	文化11.8.8	55	文化11.8.19
63	802	山本熊吉	13	京都	文化12.11.10	62	文化12.11.22
64	803	草野甚吉	12	近江	文化12.11.10	62	文化12.11.22
65	804	橋本宇之助	12	京都	文化12.11.10	62	文化12.11.22
66	805	水野源三郎	13	美濃	文化14.11.12	71	文化14.11.23
67	806	寺崎善三郎	13	近江	文化14.11.12	71	文化14.11.23
68	807	高木脇三郎	13	美濃	文化14.11.12	71	文化14.11.23
69	808	崎山又吉	13	近江	文政1.9.13	75	文政元.9.25
70	809	西野亀吉	13	加賀	文政4.9	84	文政4.9.19
71	810	岩田伝三郎	12	京都	文政4.9	84	文政4.9.19
72	811	小野幸吉	13	京都	文政4.9	84	文政4.9.19
73	812	徳永文吉	12	京都	文政4.9	84	文政4.9.19
74	813	中田熊吉	13	京都	文政5.8	86	文政5.9.1
75	814	三宅九藏	13	美濃	文政5.8	86	文政5.9.1
76	815	塚永音吉	13	大和	文政9.9.15	99	文政9.9.28
77	816	岡崎秀三郎	13	山城	文政9.9.15	99	文政9.9.28
78	817	中西利之助	16	京都	文政9.9.15	99	文政9.9.28

月江戸本店勤」、番号無しの一人は「文化二丑江戸本店勤申渡」、七七四・七七五番の二人が「同年十月江戸本店勤申渡、廿五日出立」と注記がなされている。前節では、実際に江戸に下って来たにも関わらず、それが「永聴記」に記されなかった場合があることを想定したが、ここでの検討は、これを実際に裏付けるものでもある。⁶⁾

本節の最後に、「江戸本店手代子供請状」二番から〈京抱え〉の子供について明らかにすることを二点付け加えておきたい。

まず、時期によって〈京抱え〉の子供の人数はどのように変化するかという問題である。第6表は、「江戸本店手代子供請状」二番に記載された人数を、宝暦元年（一七五二）から天保十一年（一八四〇）までの九〇年間の範囲において、一〇年ごとにまとめたものである。宝暦元年から同一〇年までは一年あたり七・六人であったものが、次第に減少し、文化八年（一八一二）以降は一年当たり二人前後まで落ち込む。この表からは、江戸本店において〈京抱え〉の奉公人が次第に減少していることがわかる。この点はあとでまたふれたい。

次に、〈京抱え〉として括られる子供たちであるが、実際の出身地はどこかという問題である。表5にあげた〈京抱え〉の子供たち一〇一人の親元の所在地をまとめてみたものが、表7である。最も多いのは近江の三七人であり、京都

到着記事	
小野清次郎	〈京抱え〉
佐々木庄太郎	〈記載なし〉
藤井熊吉	〈記載なし〉
田井慶次郎	〈記載なし〉
谷沢嘉三郎	〈記載なし〉
前田常吉	〈記載なし〉
高木多次郎	〈記載なし〉
高木栄次郎	〈記載なし〉
山本政吉	〈記載なし〉
重村常次郎	〈記載なし〉
辻梅吉	〈記載なし〉
東駒吉	〈記載なし〉
武藤竹次郎	〈記載なし〉
魚住新太郎	〈記載なし〉
桑原七太郎	〈記載なし〉
藤井勇次郎	〈京抱え〉
池田惣次郎	〈京抱え〉
成田徳三郎	〈京抱え〉
大石庄次郎	〈京抱え〉
本条辨次郎	〈京抱え〉
河村松之助	〈京抱え〉
東芳五郎	〈京抱え〉
井狩文吉	〈京抱え〉
竹村嘉三郎	〈京抱え〉
森岡竹三郎	〈京抱え〉
中野徳之助	〈京抱え〉

本152, 153)。
本1433, 1434)による補遺。
明のため、京本店泊り始め
には、「永聴記」の到着記事

越後屋江戸本店子供の供給元について（西坂）

#	「江戸本店手代子供請状」					「永聴記」子供江戸	
79	818	小野清次郎	12	京都	文政9.9.15	99	文政9.9.28
80	819	佐々木庄太郎	12	京都	文政11.10.14	108	文政11.10.22
81	820	藤井熊吉	13	京都	文政11.10.14	108	文政11.10.22
82	821	田井慶次郎	13	山城	文政11.10.14	108	文政11.10.22
83	822	谷沢嘉三郎	14	摂津	文政11.10.14	108	文政11.10.22
84	823	前田常吉	12	和泉	文政11.10.14	108	文政11.10.22
85	824	高木多次郎	13	美濃	文政12.6	112	文政12.6.24
86	825	高木栄次郎	13	美濃	文政12.6	112	文政12.6.24
87	826	向崎徳三郎 * 4	24	京都	(文政12.10.25)		
88	827	山本政吉	12	京都	天保3.9	129	天保3.9.29
89	828	繁村常次郎	13	京都	天保3.9	129	天保3.9.29
90	829	辻梅吉	12	近江	天保4.10.11	136	天保4.10.23
91	830	東駒吉	12	近江	天保4.10.11	136	天保4.10.23
92	831	福井喜助 * 5	35	山城	天保5.9.20		
93	832	武藤竹次郎	13	京都	天保5.9.20	139	天保5.10.3
94	833	魚住新太郎	13	京都	天保5.9.20	139	天保5.10.3
95	834	桑原七太郎	13	近江	天保5.9.20	139	天保5.10.3
96	835	藤井勇次郎	14	山城	天保8.5.16	153	天保8.5.26
97	836	池田惣次郎	不明	近江	天保8.5.16	153	天保8.5.26
98	837	成田徳三郎	12	京都	天保8.5.16	153	天保8.5.26
99	838	大石庄次郎	13	京都	天保8.5.16	153	天保8.5.26
100	839	本条榊次郎	14	京都	天保8.5.16	153	天保8.5.26
101	840	河村松之助	14	京都	天保8.5.16	153	天保8.5.26
102	841	東芳五郎	13	京都	天保9.9.7	156	天保9.9.17
103	842	井狩文吉	13	近江	天保9.9.7	156	天保9.9.17
104	843	竹村鹿三郎	12	京都	天保9.9.7	156	天保9.9.17
105	844	森岡竹三郎	14	近江	天保9.9.7	156	天保9.9.17
106	845	中野徳之助	12	京都	天保9.9.7	156	天保9.9.17

出所) 「江戸本店手代子供請状」(三井文庫所蔵史料 別39), 「永聴記」(三井文庫所蔵史料
 注) 「江戸本店手代子供請状」の[年齢]の()内は「奉公人抱帳」(三井文庫所蔵史料
 [親元]のうち「山城」は京都を除く。[江戸下り]のうち()内は江戸下り時期が不
 の時期を示す。「江戸本店手代子供請状」記載者のうち、再勤または他店勤務者の場合
 を省略した(*1・2・5は再勤,*3・4は芝口店勤)。
 「永聴記」の「江戸着」は、江戸到着の記事が記載された日付を示す。

第7表 江戸本店の
京抱え子供の出身地
(寛政9年～天保9年)

親元	人数
近江	37
京都	33
美濃	15
山城	9
大和	2
伊勢	1
伊賀	1
加賀	1
摂津	1
和泉	1
計	101

出所) 第5表より作成。

注) 「山城」には京都は含まない。

第6表 「江戸本店手代子供請状」
記載人数 (10年ごと)

年代	人数
宝暦元 (1751)～宝暦10 (1760)	76
宝暦11 (1761)～明和7 (1770)	61
明和8 (1771)～安永9 (1780)	40
天明元 (1781)～寛政2 (1790)	62
寛政3 (1791)～寛政12 (1800)	54
享和元 (1801)～文化7 (1810)	30
文化8 (1811)～文政3 (1820)	22
文政4 (1821)～天保元 (1830)	19
天保2 (1831)～天保11 (1840)	21
	385

出所) 「江戸本店手代子供請状」(三井文庫所蔵史料 別39)。

注) 請状番号465から848までの384名と番号欠1名(文化2年)の合計385名。

はそれに次ぐ三三人にとどまっている。〈京抱え〉として括られるが、それは京本店を介して江戸本店に奉公しているということであり、実際は京都の比重はあまり大きくなく、むしろその周辺部が多くなっている。

(1) 「江戸本店手代子供請状」二番 (三井文庫所蔵史料 別三九)。

(2) 「京本店手代子供請状」(三井文庫所蔵史料 別三六、本一五三六～一五三八)。

(3) 供給元の〈記載なし〉の子供のうち、〈伊勢抱え〉と推定した二〇九人のなかには稀に親元の住所が記されている場合があるが、以下に示すように、その親元の住所はいずれも伊勢国である。

(文政七年四月二八日)

一 当店勤仕子供左之通

田丸新町源兵衛悴内堀宇之助、津領本郷村庄右衛門悴増

田徳五郎

同領同村長五郎悴加納長松、田丸本町吉兵衛悴小西栄吉

右之者共道中無難今夕致到着候

（文政八年三月一四日）

一当店勤仕子供左之通

一津領六根村利兵衛伴 植田新吉

一鳥羽領坂本村三郎兵衛伴 岩本久三郎

一津領櫛田村与三兵衛伴 三宅与三次郎

一雲出本郷村忠藏伴 増田文次郎

一雲出高峯村与兵衛伴 和田音次郎

右之者共道中無難今夕致到着候

（文政八年五月二七日）

一当店勤仕子供勢州一志郡津領曾原村矢田新九郎、道中無難今夕致到着候

（文政八年八月二七日）

一当店勤仕子供左之通

一田丸領西池上村庄八伴 小竹善次郎

一同村林内伴 大村林次郎

一神領斎宮村孫七伴 澄野勇次郎

右三人道中無恙今夕致到着候

（文政八年一〇月一五日）

一当店勤仕子供左之通

一飯野郡久保村仙藏伴 溝田伊藏

一三重郡日永村善平伴 石崎亮藏

右兩人道中無恙今夕致到着候

（4）なぜこの時期に限って「京抱え」の子供の江戸到着記事が記載されなかったのか、その事情は明らかではない。

（5）「奉公人抱帳」（三井文庫所蔵史料 本一四三三）。

（6）「永聴記」の子供の江戸到着記事に欠落があるとすれば、実際に江戸本店に新規に入店する子供の人数はどの程度であろうか。仮定に仮定を重ねる形になるが、一年当たりの新規子供人数の推定を試みたい。方法としては、一年当たりの半元服人数と、入店した子供のうち半元服する者の比率を推定し、前者を後者で除することによって、一年当たりの新規子

供の人数を出してみるといふものである。

まず、一年当たりの半元服人数について。「永聴記」では、寛政九年（一七九七）から天保九年（一八三八）までの四年・八四季のうち、五五季に半元服の記載があり、その人数は三九六人である（第3表参照）。一季当たり七・二人、一年当たりに換算すると一四・四人となる。ここでは半元服の記事が残っていない時期についても、記事が残っている時期と同様に半元服の申渡がなされたと仮定する。

この半元服人数の推測値が妥当なものか吟味しておきたい。着目するのは本元服の人数である。本元服は、半元服と同様、八四季のうち五五季に記載があり、二九九人が載っている（第3表参照）。一季当たり五・四人、一年当たりに換算すると二〇・八人となる。この数値は以下で説明するように「店々人数留」（三井文庫所蔵史料 本一〇九一〜一〇九六）からうかがえる一年当たりの本元服者の数と近い。「店々人数留」という史料は、越後屋の各店舗について、一年ごとに、重役手代から末端の手代までの名前を書き並べたリストである。ある年と次の年の「店々人数留」の手代名を照合することによって、次の年の末尾に新規に登場する手代を、あらたに手代の末端に連なった者＝本元服した者ととらえることができる。これによって検出できる本元服者は、江戸本店についてみると、文化四年（一八〇七）から天保一〇年（一八三九）の三三年の間で合わせておよそ三六〇人を数える。一年当たりで一〇・九人となる。この数値は前述した「永聴記」の本元服記事から推測した人数一〇・八人とほぼ符合する。もし、この本元服の推測人数が妥当なものであるならば、同様にして出された半元服のほうの一年あたりの人数一四・四人という推測値もあながちの外れではないと考えることができる。

次に、入店した子供が半元服する比率について。これは江戸に到着した子供のうち何人が半元服するかについて調べることによって推測することが可能である。第4表①～⑤は半元服者をリストアップし江戸到着記事を照らし合わせたものであるが、ここでは反対に、その期間の江戸到着者をリストアップし、それらが半元服するかどうかを調べてみる。

①寛政九年（一七九七）二月到着の森田佐吉から寛政十一年（一七九九）四月の高木市太郎までの五六人の到着者のうち四五人が半元服している（八〇・四パーセント）。

- ②文化四年（一八〇七）三月到着の川本竹次郎から文化六年（一八〇九）二月の一色亀吉までの三九人の到着者のうち、三五人が半元服している（八九・七パーセント）。
- ③文化十一年（一八一四）一〇月の奥野惣蔵から文化十二年（一八一五）一二月の中津吉五郎までの三三人の到着者のうち、二二人が半元服している（六六・七パーセント）。
- ④文政十一年（一八二八）一月の金石新吉から天保元年（一八三〇）一月の南長之助までの二七人の到着者のうち、二四人が半元服している（八八・九パーセント）。
- ⑤天保二年（一八三一）五月西岡寅次郎から天保六年（一八三五）三月の野口十次郎までの五四人の到着者のうち、四三人が半元服している（七九・六パーセント）。
- ①から⑤までを合計すると、二〇九人中一六九人が半元服しており、その比率は八〇・一パーセントになる。そして第4表①～⑤の期間以外の時期においても、同様の半元服比率であったと仮定する。
- 以上の一年当たりの半元服人数を一四・四人、入店子供の半元服率を八〇・一パーセントとする推定に基づけば、江戸本店に新規に入店する子供の一年当たりの人数については、一四・四を〇・八で除して、一八人という数値が得られる。ちなみに、第二節注（3）で述べたように、京本店の事例をみると寛政九年（一七九七）から天保九年（一八三八）までの期間に入店した子供の数は五四四人で、一年当たり一三人となる。江戸本店と京本店の人的規模を考えると、江戸本店の一年当たりの入店子供の人数を一八人とする試算の結果には大きな不都合はないものと思われる。

おわりに

本稿では、三井越後屋の江戸本店の店表の奉公人がどこから供給されてきたかという問題を、江戸本店の「永聴記」に記された子供の江戸到着記事をもとに検討を加えてきた。その結果は以下のようにまとめられる。

第一節では、「永聴記」に記された子供の江戸到着記事の概要について検討した。寛政九年（一七九七）から天保九年（一八三八）までの四二年の間に、五〇七人の子供が江戸に到着したことが記されており、それらは供給元の記載により、「伊勢抱え」二〇九人、「京抱え」七〇人、「記載なし」二二八人に分類された。このうち「記載なし」は、実際には「伊勢抱え」か「京抱え」のいずれかであるものと推測した。

第二節では、「永聴記」の子供の江戸到着記事にあらわれる江戸下りの子供は、江戸本店の子供のうちのどの程度を占めるかについて、同じ「永聴記」の半元服記事と照合させることによって検討した。二年以上継続して半元服の記事が残っている五つの時期について、二〇〇人分の半元服者のリストをつくり子供の江戸到着記事と照合したところ、二〇〇人のうち一六九人は子供の江戸到着記事に現れるものたちであることが確認できた。これにより江戸到着記事に現れる江戸下りの子供が、江戸本店の半元服者の少なくとも八割以上を占めるものであることがわかった。照合不能の者のうちにも、実際は江戸に下ってきたが、「永聴記」に記録されなかった事例が多く含まれるものと推測した。

第三節では、江戸下りの子供のうちで供給元の「記載なし」としたグループのうちでの「伊勢抱え」と「京抱え」の比率について検討した。ここでは京本店が作成した「江戸本店手代子供請状」を「京抱え」の全容を示すものとしてとりあげ、それと「永聴記」の子供の江戸到着記事とを照合した。それによると「永聴記」の供給元「記載なし」の二二八人のうち一九人については「江戸本店手代子供請状」と対照できたことにより、実際には「京抱え」であることがわかった。これにより「記載なし」の残り二〇九人については「伊勢抱え」とみなすことが可能であると推定した。この推定に基づけば、江戸到着記事の五〇七人については、実際の「伊勢抱え」が四一八人（八二・四パーセント）、実際の「京抱え」が八九人（一七・六パーセント）と区分することが可能となる。

「はじめに」で述べたように、江戸店持ち京商人の奉公人については、京都および本家にとって出自等で関係の深い

地域から供給されたという理解が示されていたが、本稿での検討から三井越後屋の江戸本店での奉公人供給も、基本的にはそれに当てはまることが確認できた。すなわち一九世紀前半においては、江戸本店の奉公人の大部分は上方方面から江戸に下ってきた者たちであり、江戸およびその周辺から供給される者は皆無ではないが僅少である。さらに、この時期に江戸に下ってきた子供の供給元は〈伊勢抱え〉が八割を超え、残りが〈京抱え〉であることがわかった。

〈京抱え〉の子供についてみると、その数は一八世紀半ば以降次第に減少し、さらに実際の出身地（親の住所）も京都ではなく、その周辺地域が多くなっていた。これは「はじめに」で述べた、京本店に奉公する子供の出身地の変化、すなわち一八世紀以降、伊勢が大きく減り、京都に集中する傾向が強まったことと連関するものとみられる。すなわち京本店で京都出身者が増え、伊勢出身者が減少することと並行して、江戸本店においては京都出身者が減少し、伊勢出身者の比重が増していったものと考えることができる。これがいかなる事情に基づくかは詳らかにできていないが、越後屋の店々の奉公人の供給については、個々の店舗だけではなく、三都の店々に伊勢を加えた関係性を考慮することが必要であることはたしかである。

また、これも「はじめに」で述べたことだが、三井の江戸両替店では、江戸本店と異なり、一九世紀前半において奉公人のうち江戸出身者の比率が五割近くに増え、天保改革から幕末までの期間では九割に達している。同じ江戸、同じ三井家の経営であっても、業種によって奉公人供給や所在する都市社会との関係の態様は異なっている。また本稿での江戸本店の検討は、天保改革以前の天保九年（一八三八）までに限られているが、江戸両替店の場合、天保改革後に江戸出身者の比率増加に拍車がかかっている。天保改革およびその後の時期についての検討も今後の課題となろう。